



2011年3月16日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

口腔疾患領域と漢方医学

大阪歯科大学 歯科医学教育開発室 教授 王 宝禮

## (6) 顎関節症の漢方治療

今回は、顎関節症に対する漢方治療についてお話いたします。

「あごが痛い」「口が開かない」「カクカク音がして痛い」こんな症状はありませんか？  
このような症状がある場合には顎関節症を疑う症状であります。

では、顎関節症の自己チェック法として次のようなことがあります。

口を大きく開いたとき、人差し指から薬指を並べた3本指を縦にして入りますか？

口を大きく開け閉めしたとき、あごの痛みはありますか？

口を大きく開いたとき、まっすぐ開きますか？

干し肉、するめ、タコなどの硬いものを食べると、あごや顔が痛みますか？

このような症状がある場合は、顎関節症である可能性があります。特に口を大きく開け閉めしたとき、あごの痛みがある場合には、専門医の受診をお勧めいたします。

さて、顎関節症とは、代表的な症状は、あごが痛む（顎関節痛）、口が開かない（開口障害）、あごを動かすと音がする（顎関節雑音）の3つで、このうち1つ以上の症状があり、鑑別診断で他の疾患がない病態を「顎関節症」と言います。

実際、あごの関節の病気で最も多いのは顎関節症です。しかし、同じような症状を示す病気、例えば滑膜性骨・軟骨腫症、咀嚼筋腱・腱膜過形成症、顎関節強直症、口腔癌・咽頭癌の咀嚼筋進展、智歯周囲炎、発作性神経痛などが多くあります。鑑別診断と治療のためにはMRI検査が必要なことがあります。

大学や総合病院の歯科あるいは歯科口腔外科には顎関節の専門外来があり、この診断と治療を専門的に行っています。

さて、顎関節とその関連臓器のしくみと働きについてであります。顎関節は手足の関節と同じような基本構造を持っていますが、異なる面も多くあります。顎関節は頭の骨（いわゆる側頭骨）のくぼみ（いわゆる下顎窩）に、下あごの上先端の骨（いわゆる下顎頭）が入り込む構造で、その間にクッションの役割をする関節円板という組織が挟み込まれています。

実際、顎関節症の受診者の7割に、この関節円板のズレがあります。関節円板のズレを明確に診断するにはMRIが最適です。

さて、顎関節症は、顎関節痛、顎関節雑音、開口障害あるいは顎運動障害の3症状を基本症状とし、頭痛、耳鳴り、肩こり、眼の異常などの多彩な随伴症状を示す機能障害で、病態によって5型、5つに分類されています。

顎関節症I型の病態は、咀嚼筋のスパズム、筋の疲労、筋炎、腱炎であり、主症状としては、筋の疼痛・圧痛、腫脹感、しびれ感、違和感、開口障害などです。

II型の病態は、靭帯損傷、関節包外傷、関節円板挫滅、関節捻挫で、主症状は関節部の疼痛、圧痛、開口障害です。

III型の主病変は顎関節内障で、主な病態は顎関節包内における関節円板の位置異常、関節円板線維化、関節円板変性などです。症状は、カクカクなどの関節雑音（いわゆるクリッキング）があり、運動障害、顎運動痛を伴うことが多いです。

IV型は変形性顎関節症で、症状は顎運動障害、顎運動痛、関節部圧痛、ザリザリと聞こえる雑音があり、X線所見で軟骨の破壊、関節円板の穿孔、下顎頭の吸収、増生や変形を認めます。

V型は精神的因子、心身症、神経症、うつ状態の関与により、咀嚼筋のスパズム、筋の疲労、筋炎などを引き起こした場合で、症状は顎関節部、咀嚼筋部の異常感、違和感、不定愁訴などです。

このおのおのI型からV型までの症型に対する治療法があります。

I型は、薬物療法として中枢性筋弛緩剤、咬合治療として全歯接触型スプリント、理学

療法としては赤外線、マイオモニター、筋訓練療法としては開閉口運動練習、開口筋群、閉口筋群、左右の協調運動練習、そして測方運動練習があります。

Ⅱ型では、薬物療法として消炎鎮痛剤、咬合治療として不良補綴物、充填物の除去、治療、理学療法として赤外線、ソフトレーザー、そして顎関節腔内注入療法があります。

Ⅲ型は、薬物療法として中枢性筋弛緩剤、消炎鎮痛剤、咬合治療として関節円板整位型スプリント、理学療法として開口訓練、徒手関節円板整位術、顎関節腔内注入療法、外科療法、関節円板整位術、関節円板切除術があります。

Ⅳ型に対しては、薬物療法として消炎鎮痛剤、咬合治療としてスプリント、咬合改善、理学療法、そして顎関節腔内注入療法、外科療法として関節円板切除術。

Ⅴ型は、薬物療法として向精神剤、抗うつ剤、咬合治療としてスプリント、理学療法。このように病型によって様々な治療法があるわけであります。

次に、東洋医学的に顎関節症を考えた場合に、顎関節症は中医学的には「痺証（ひしょう）」という病態に含まれます。「痺（ひ）」とは塞がって通じないという意味であり、「痺証」とは風寒（ふうかん）・湿・熱などの邪気が、人体の経絡（けいらく）・関節などを侵して、筋肉（きんにく）・筋骨・関節の痛み、だるさ、運動制限、腫脹などの症状を呈する病症であります。現代医学のリウマチ・慢性関節炎・頸椎症・五十肩・神経痛・筋肉痛などを包括します。

さて、顎関節症の病態によって 5 型に分類されていると説明しましたが、その 5 型の分類に対して実証、中間証、虚証と分けた場合、実証では主に葛根湯と芍薬甘草湯、中間証は加味逍遙散と桂枝加朮附湯、芍薬甘草湯、柴朴湯、そして虚証には加味逍遙散、桂枝加朮附湯、芍薬甘草湯、甘麦大棗湯、半夏厚朴湯などが主に処方されます。

さらに、表裏、実証・虚証、瘀血、痛み、喉の異物感、のぼせから、漢方薬の処方を考えていきます。

まず私の場合に、顎関節症を表と裏に分けます。表であり実の場合、症状にうっ血、発熱、悪寒、筋肉や項背部の緊張がある場合には葛根湯、表であり虚の場合、四肢の冷え、関節痛がある場合には桂枝加朮附湯。

そして裏であり瘀血がある場合、そして虚の場合に症状に貧血、頭痛、めまい、肩こり、月経不順があれば当帰芍薬散、虚であり、のぼせがあり、イライラ、肩こり、冷え、月経不順、精神不安がある場合には加味逍遙散、中間証から実証の場合、のぼせがあり、頭痛、肩こり、めまい、月経不順があれば桂枝茯苓丸、のぼせがなく、関節痛、腰痛、神経痛の傾向があれば疎経活血湯。

裏であり瘀血はなく、痛みがある場合、関節・筋肉のけいれん性の痛み、芍薬甘草湯、瘀血がなく、痛みもなく、喉の異物感がある場合、そして症状として、ときに動悸、めまい、吐き気、うつ傾向があれば半夏厚朴湯、喉の異物感があり、咳、気管支喘息になりや

すい場合には柴朴湯。

痛みがなく、喉の異物感もなく、虚の場合、そして不眠や神経症、寝汗、乾燥となる場合には柴胡桂枝乾姜湯、さらにイライラがあった場合には抑肝散、食欲不振、胃腸虚弱、うつ傾向であれば六君子湯。

喉の異物感がなく、中間証と実証の場合、のぼせ、イライラ、不眠があった場合には黄連解毒湯、そしてのぼせがなく、関節痛、口が渇いたり尿の状態がよくない場合には五苓散、そして吐き気、心下痞の場合には半夏瀉心湯。

このような形で、表裏、実証・虚証、瘀血、痛み、喉の異物感、のぼせから漢方薬の処方しております。

まとめとして、顎関節症に対する漢方薬の投与方法。1つ、顎関節症の分類からその病型を診断すること、2、顎関節症にしばしば使用される漢方薬の特徴を参考にすること、3つめ、顎関節症の病型と虚実証による適応により治療方針を決定することです。

私の場合は、顎関節症に対して西洋医学的な治療を施し、そして治癒があまり改善されない場合に漢方薬を処方する。そういったような治療体系を組んでおります。